2020（令和2）年3月11日（水）　京都新聞（夕刊）3面

CULTURE
カルチャー

上賀茂発
地球研フィールドノート

新時代の精神　高校生の発想に鼓動

⓫ 若者への環境教育

総合地球環境学研究所研究員　宗田勝也

芥川龍之介の作品に、江戸時代の大学者・貝原益軒のエピソードを扱ったものがあります。

―乗合船の中、一人の書生が古今の学芸をとうとうと語る。下船の際、当時のならわしに従って互いに名乗りあったところ、益軒がいたことを知り、書生が深く恥じ入る―。

謙譲の美徳を説く話ですが、龍之介は「益軒の知らぬところで新時代の精神は年少の書生の放論の中にも如何に溌剌と鼓動していたか！」と言うのです。私はこの作品が好きで、若い頃、自分の考えがいかに未熟でもそこには「新時代の精神」がきっと鼓動しているはずだ。そんな風に自分を励ましていました。

2019年4月より総合地球環境学研究所で「環境教育」を担当し、教育協力協定を結んでいる洛北高と北稜高の授業サポートに通うようになりました。私の専門は「難民の問題」です。ラジオで難民問題を発信したり、ミャンマー難民の方々と一緒に日本語教室の運営などに関わったりしてきました。これまで難民と環境問題は研究上、あまり関係がない分野のように思われてきました。しかし地球研は「環境の問題は人間の文化とつながっている」と捉えます。紛争や迫害といった人間の営みの結果、住み慣れた家を追われた難民と環境問題には、自分（たち）以外の存在に無関心、不寛容であるという根本的なつながりがあると考えています。これまで高校時代に触れた難民問題によって人生が大きく変わったという多くの若者と出会ってきました。地球環境問題に触れて人生が大きく変わったという高校生を生み出したいと思っていました。

洛北高では研究の基礎を学び、自分で課題を立て探求する力を養います。北稜高では自分たちの身近な環境と地球環境を結び付ける構想力と伝える力を育みます。

毎回の授業が忘れられないエピソードに満ちています。

例えば洛北高では「音楽のリラクゼーション効果」を調べるため、トイレでいろいろな曲を流したグループが、石川さゆりの「津軽海峡冬景色」を選曲していたことがあります。2年生のクラスでは「課金で環境を変えよう！～SDGsの取り組みについて」というテーマを設定し、国連が定める持続可能な開発目標、SDGsの掲げる「貧困」や「飢餓」「気候変動」などの課題について高校生がどの課題に関心があり、月額いくらまでなら課金できるかを探ろうとしたグループが現れました。

自由な発想の可能性に驚きました。また、彼ら／彼女らが熱心に話し合っている時、授業前のノンビリした空気とは打って変わり、研究者の真剣な目になっていたことが印象に残っています。その迫力に言葉をかけることをためらった場面が幾度もありました。

また北稜高では、地球研の研究者が最先端の知見を伝え、生徒たちがグループで研究した成果を地域の小学校で発表します。教室では「知識を受け取る側」だった高校生たちが、自分たちで調査を進め、小学生に分かりやすいよう工夫をして「知識を伝える側」となり、堂々と説明していました。「高校生だから知識を受け取る側で当然」との思い込みがいかに根拠のないものかを感じました。

それらの思いをひときわ強くしたのが、今年2月、国立京都国際会館で開催された第11回「KYOTO地球環境の殿堂」国際シンポジウムです。今回は「気候変動」がテーマでした。いま世界中で、グレタ・トゥーンベリさんをはじめ若者が、経済活動を優先するのではなく地球温暖化のリスクに関する科学的知見に目を向けてほしいと訴えるように、気候変動は次世代や発展途上国により強い影響が出るため、初めて高校生に参画してもらうことになりました。

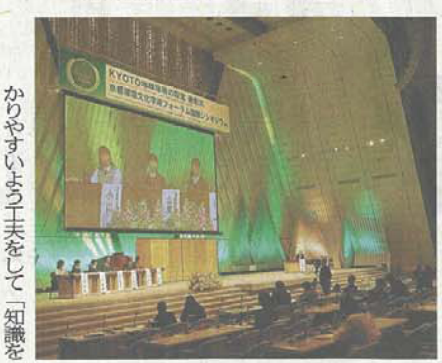
そして当日、パネリストとして登壇した女子高校生の発言に会場がどよめきました。彼女は怒りをあらわにした同世代の行動に共感を示しつつも、対立軸を作ってしまい若者しか参加しにくい現状を指摘しました。そして「世代間で分裂とか対立とかせずに、一丸となって環境問題に取り組んでいければいいと思います」と、親子で参加できるムーブメントを提案したのです。会場から自然と拍手が湧き起こりました。

この高校生の発言には「新時代の精神」がはっきりと鼓動しているのではないでしょうか。

環境教育の担当となった時、地球研の「知」をどのように高校生たちに伝えればよいかを考えました。1年がたち「彼ら／彼女らの持つ力をともに発見するにはどうすればよいだろう」。そんなことを考えています。これは高校生にかぎったことではありません。地球研が掲げる「超学際アプローチ」、すなわち研究者が地域の人たちとともに考え、課題の解決に向かうというアイデアの核心ではないかと思っています。

―おわり

北稜高の生徒と明徳小の児童との学習交流会。生徒たちは伝えながら学ぶ。それが次の行動への糧となっている（2月7日、京都市左京区）



第11回「KYOTO地球環境の殿堂」国際シンポジウムに登壇した高校生
（2月11日、左京区・国立京都国際会館）

そうだ・かつや　1966年、京都市出身。同志社大総合政策科学研究科修了。同大学客員准教授を経て2019年より現職。専門は強制移動研究。著書に「誰もが難民になりうる時代に―福島とつながる京都発コミュニティラジオの問いかけ」など。

※京都新聞社の許可を得て掲載しています